

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03089

研究課題名（和文）青年期の自閉スペクトラム症者と家族に対するスキーマ療法を用いた心理教育の実証研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of Cognitive Behavioral Therapy Approaching Anxiety and Related Autism Spectrum Disorder Traits

研究代表者

大島 郁葉 (Oshima, Fumiyo)

千葉大学・子どものこころの発達教育研究センター・教授

研究者番号：40625472

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：自閉スペクトラム症の青年期の大学生30名に対し、研究代表者らが開発した「自閉症に気づいてケアするプログラム（Aware and Care for my Autistic Traits：ACAT）」をランダム化比較試験にて、全部で6回施行し、その成果を確認した。その結果、ACATを受けた群のほうが、自閉特性に対する理解が増したことが確認された。一方で、メンタルヘルスの指標および社会的適応の増進は認められなかった。これには比較的短時間での介入であったことから、長期的な変化に関しては成果がでなかったことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果、ACAT介入を行った群のほうが有意に自閉特性に対する自己理解および対処方略の数が増加した。いっぽうで、メンタルヘルスの指標に関する有意差はなかった。ここからは、自己理解は重要であるものの、環境調整など社会的な介入も大事であることが示唆された。

本研究結果は、個別の自閉特性を本人が理解することの意義が明らかになり、新しい自閉スペクトラム症の支援サービスとして提供することで、従来の自閉症支援に新しいスタイルのものが加わった形となりうる。

研究成果の概要（英文）：The Aware and Care for my Autistic Traits (ACAT) programme, developed by the principal investigators, was delivered six times to 30 adolescent university students with autistic spectrum disorder in a randomised controlled trial. The results confirmed that the group who received ACAT had an increased understanding of autistic traits. However, there was no improvement in mental health indicators or social adjustment. This suggests that the intervention was relatively short-lived and therefore not successful in terms of long-term change.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自閉スペクトラム症 青年期 認知行動療法

1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) は、「対人コミュニケーションの障害」と「限定された反復的な行動様式」を主徴とする神経発達症群の 1 つである (APA, 2013)。ASD の障害 (disability) は心理社会的問題である社会的障壁と機能障害の相互作用によって規定される (桑原, 2016)。

ASD 児・者が心理的不適応の状態なのに行動として表出しない場合には、ASD により生じる困難に家族や周囲は気づきにくい。そのため、ASD に対応したケアやサポートを受ける機会がないままに成長し、心理的不適応が慢性的に続くことがある。とくに思春期以降は自主的な行動や対人関係が活発になることで、ASD 児・者は周囲との差異に気づき始め、自己肯定感あるいは自己効力感が低下し、不安や抑うつ気分が出現することが多い (Weiss et al., 2014; White et al., 2009)。たとえば成人の ASD 者は健常群に比べ、有意に主観的幸福感が (Quality of Life; QOL) が低いことが知られている (Kamio & Inada, 2012)。また、ASD の特性を持つ若者は、大学での適応が低い、その低さと ASD の特性と関連が見られる (Trevisan & Birmingham, 2016)。

そのため近年、大学では、ASD 者に対し、大学内での適応に向けた様々なサポートプログラムが用意されている (Sarrett, 2018, Gelbar, Smith, & Reichow, 2014)。そのいっぽうで、ASD と診断されて援助が可能な環境下でも、本人の中で ASD 診断と生活の困難が結びついていないなら、援助要請を行わないかもしれない (Schnyder, Panczak, Groth, & Schultze-Lutter, 2017, Mogensen & Mason, 2015)。

思春期以降の ASD 者においては、心理的不適応が社会的不適応を悪化させる可能性があることから、大学内におけるサポートプログラムのように社会的不適応に対応するのはもちろんだが、心理的不適応への対応も重要だと考えられる。社会的不適応を標的にした ASD 者への介入には、併存する精神疾患に対する薬物療法や認知行動療法 (Cognitive Behavior Therapy; CBT)、活動能力を向上させる Social Skills Training (SST)、環境調整 (ペアレント・トレーニング、合理的配慮)・環境の変更など様々な介入法で対応できるが、心理的不適応を標的にした介入法は乏しく、心理教育プログラムを開発する意義は大きいと思われる。

国外では近年、ASD の自己理解や診断の受容、スティグマの軽減を目的とした親子合同の心理教育プログラムが施行されており、少なくとも、その短期的な効果は実証されている (Gordon et al., 2015)。しかし、Gordon の心理教育プログラムは ASD への気づきへの改善をもたらしたが、適応は改善しなかった。

大島ら (2017) は、心理教育により得られる効果 (ASD への気づき) に加え、CBT の治療形態が ASD 者に親和的であるという開発コンセプトをもとに、児童思春期の ASD 児・者を対象に、CBT のフレームワークに欧米諸国の心理教育プログラムのコンテンツを加え、国内で標準的に利用出来る ASD の心理教育プログラム (Aware and Care for my Autistic Traits; ACAT) の開発を行った。ACAT は、ASD 者および養育者が ASD の知識を正しく学習し、自身の ASD の特性を理解し、その特性に対する対処方略スキル (合理的配慮を申請することをも含む) が増すことで、結果として社会的・心理的不適応が解消する、という効果を仮定している。

ACAT は児童思春期の ASD 者および保護者を対象とした多施設型 RCT において、ASD への気づきに加え、適応の向上の効果が確認された (Oshima et al, in submission)。ACAT はもともと思春期における親子参加型の CBT であるが、自身の ASD の特性を理解したうえでその特性に見合った対処方略スキルを増強するというプロセスにおいては年代を問わない。そのため、自主的な行動の増える高等教育機関に在籍する ASD 者に対し個別 CBT として ACAT を提供することが ASD 者の QOL の向上に寄与すると考えた。

本研究は、高等教育機関に在籍し、かつ定期的に通院精神療法を受けている成人期初期 (18 歳 ~ 30 歳) の自閉スペクトラム症診断のある患者に、認知行動療法を用いた心理教育プログラムとして、通常診療 (TAU) に本プログラムを併用する (COMB) 群と、単独群を比較する。Vineland2 適応行動尺度を主要評価項目とした臨床効果における有効性を、ランダム化比較試験により検証する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、成人期初期 (18 歳 ~ 30 歳) の自閉スペクトラム症の診断のある患者に、認知行動療法を用いた心理教育プログラムを実施し、通常診療 (TAU) に本プログラムを併用 (COMB) することが、TAU 単独と比較し、自閉症知識尺度、Vineland2 適応行動尺度を主要評価項目とした臨床効果における有効性を、ランダム化比較試験により検証する。主要評価項目は子ども若者版 Autism Knowledge Quiz (AKQ-C) セクション 1 および Vineland-

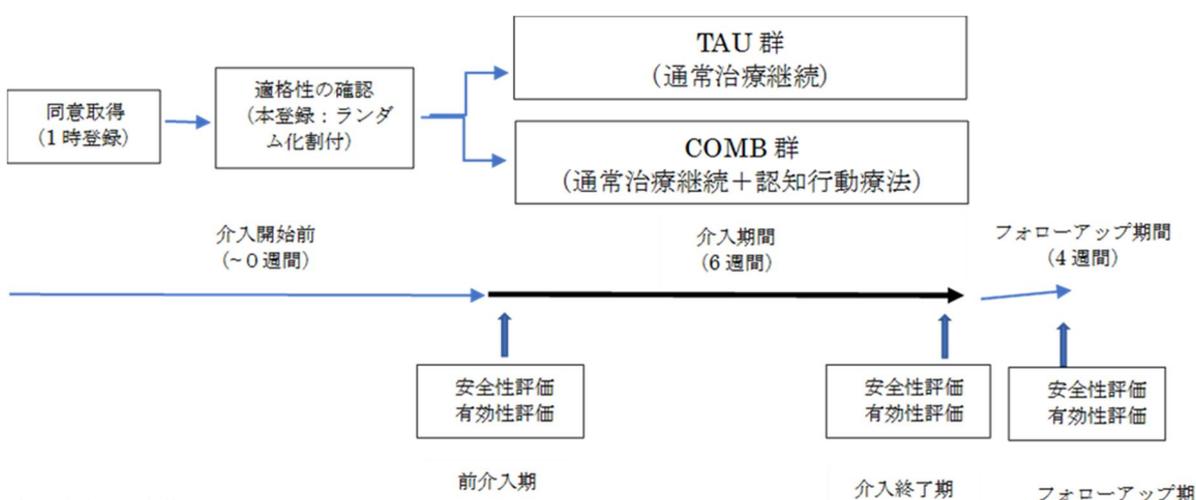
2 適応行動尺度を用いて、各群のベースラインから 6 週時点でのエンドポイントにおける変化量を比較する。また、副次評価項目として、大学適応尺度における大学生生活での適応感の向上の評価や、スティグマ尺度によるセルフ・スティグマの軽減率評価も行う。

本試験の遂行により、ASD を有する患者のうち、診断後の通常治療では十分な ASD の特性理解や気づきが得られないものに ACAT を実施することの効果・意義が検証され、エビデンスに基づく新たな治療戦略の確立および普及が推進されるものと考えられる。さらには、ASD を有する患者が、より適切な治療を受けることが可能となることで、社会機能を早期に回復でき、本邦の保健・医療サービスの向上に寄与するものと考えられる。

3. 研究の方法

本試験計画に同意が得られた試験適格者は、通常診療継続 (TAU) 群と通常診療継続と認知行動療法の併用 (COMB) 群にランダムに割り付けられ、6 週の介入期間および 4 週のフォローアップ期間を経て試験終了となる。有効性・安全性評価のための検査は、介入開始前 (スクリーニング検査 0 週)、介入終了後 (6 週、10 週) に実施する。なお COMB 群は、一回 100 分の認知行動療法を、週 1 回の頻度で計 6 回受ける。

試験のフローチャート



試験参加予定期間

最短 10 週間、最長 20 週間 (介入期間 10 週間+許容範囲 10 週間)
毎週同曜日同時刻の介入のため、祝日などにより、後ろにずれることがある

目標被験者数と試験実施期間

1 群あたり 35 例 (計 70 例)

介入プログラム概要

CBT セッション	各セッションの内容
プレセッション	心理アセスメント検査の結果を共有する ASD/ADHD について知る ACAT の目的について知る 現在の問題について整理する
第 1 回目	適応とは何かを知る・CBT について知る・ASD の特性と不適応の関連性を理解する ASD の特性について理解する
第 2 回目	ASD の特性の「強み」と「弱み」を理解する ASD の特性と不適応の関連性を認知行動モデルに基づき理解する
第 3 回目	ASD の特性に名前を付ける ASD の特性と不適応の関連性を認知行動モデルに基づき理解する
第 4 回目	認知行動モデルでの事例概念化を行い、不適応のパターンをつかむ
第 5 回目	対処方法 (認知的・行動的変容: 合理的配慮) の計画を立て、実行する

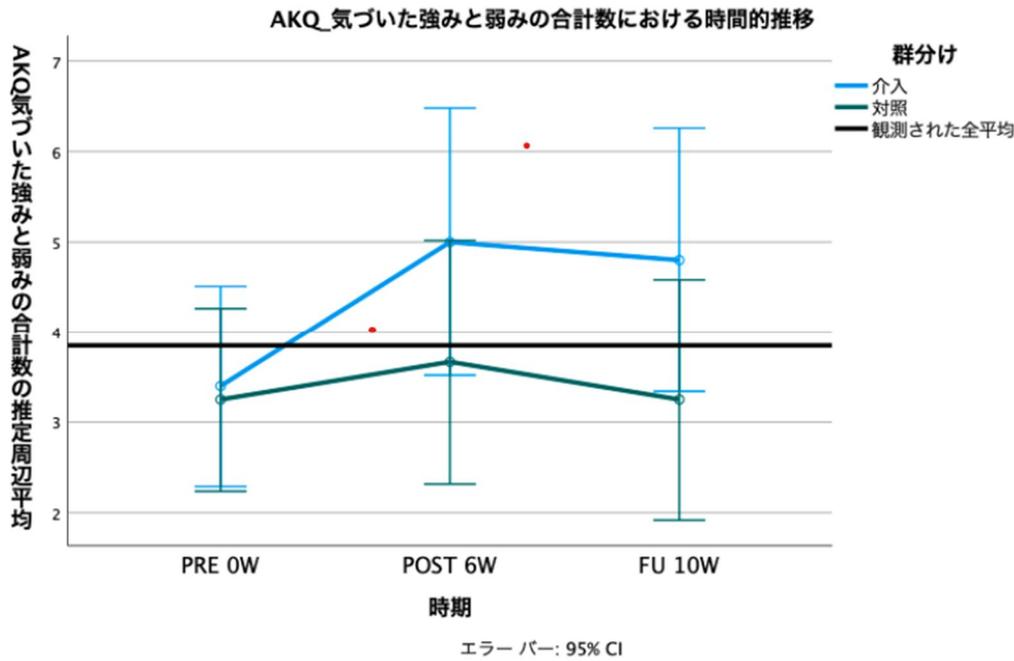
第 6 回目	対処方法（認知的・行動的変容：合理的配慮）の実行 / これまでのまとめを
フォローアップ	ACAT で何を行ってきたかの復習をする 今後の対処方略のパターンを書きだし、セッション終了後の対処についての見通しを立てる

試験担当者は「ASD に気づいてケアする CBT」(金剛出版, 2020) という ACAT のワークブックを出版している。それをもとに 6 週の「ASD に気づいてケアするプログラム (Aware and Care of my AS Traits ; ACAT) 」プログラムを作成した。本研究は ACAT のプロトコル (大島・桑原, 2020) に従って行う。下記に要約を記す。

4 . 研究成果

全体で 30 例の高等教育の学生の自閉症者が参加した。

まず、結果としては、ACAT の介入は、対照群と比べて、自閉特性による強みと弱みの気づきの生起数は、介入直後に向上され、介入 4 週後にも維持された (図) 。一方で、他の効果指標においては有意差はなかった。



このように、ACAT は自閉特性の理解に寄与することが示された。今後は、時間差での効果も考えられるため、フォローアップの期間の調整を行い、再度検討したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Hongo Minako, Oshima Fumiyo, Guan Siqing, Takahashi Toru, Nitta Yusuke, Seto Mikuko, Hull Laura, Mandy William, Ohtani Toshiyuki, Tamura Masaki, Shimizu Eiji	4. 巻 29
2. 論文標題 Reliability and Validity of the Japanese Version of the Camouflaging Autistic Traits Questionnaire	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PsyArXiv	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 大深 俊幸, 大島 郁葉, 若林 明雄, 生稲 直美, 吉田 智子, 岩倉 かおり, 齊藤 朋子, 高田 護, 潤間 励子, 清水 栄司, 今関 文夫	4. 巻 59
2. 論文標題 うつ病が併存する自閉スペクトラム症者の脳活動と治療的介入による効果の予備的研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 CAMPUS HEALTH	6. 最初と最後の頁 284-286
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村上 元, 清本 憲太, 大島 郁葉, 森本 隆文, 及川 直樹, 村上 正和, 池田 望	4. 巻 8
2. 論文標題 成人期自閉スペクトラム症者の被害妄想的観念に関する文献的検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本医療大学紀要	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Emiko Oshita, Fumiyo Oshima, Minako Hongo, Siqing Guan, Yusuke Nitta, Eiji Shimizu	4. 巻 13
2. 論文標題 Does Treatment Stigma among Adolescents with Autistic Spectrum Disorder and Their Guardians Affect the Effectiveness of Cognitive Behavioral Therapy? A Secondary Analysis of a Randomized Controlled Trial	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 子どものこころと脳の発達	6. 最初と最後の頁 81-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34572/jcbd.13.1_81	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Oshima Fumiyo, Murata Tomokazu, Ohtani Toshiyuki, Seto Mikuko, Shimizu Eiji	4. 巻 14
2. 論文標題 A preliminary study of schema therapy for young adults with high-functioning autism spectrum disorder: a single-arm, uncontrolled trial	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BMC Research Notes	6. 最初と最後の頁 online
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13104-021-05556-1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Oshima F,William M,Takahashi N,Tsuchiyagaito Ai,Kuwabara H,Shiina A,Seto M,Hongo M,Iwama Y,Hirano Y,Sutoh C,Taguchi K,Yoshida T,Kawasaki Y,Ozawa Y,Masuya J,Sato N,Nakamura S,Kuno M,Takahashi J,Ohtani T,Matsuzawa D,Inada N,Kuroda M,Ando M,Hori A,Nakagawa A,Shimizu E.	4. 巻 21
2. 論文標題 Cognitive-behavioral family therapy as psychoeducation for adolescents with high-functioning autism spectrum disorders: Aware and Care for my Autistic Traits (ACAT) program study protocol for a pragmatic multisite randomized controlled trial	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Trials	6. 最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13063-020-04750-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島郁葉、浦尾悠子、清水栄司	4. 巻 5
2. 論文標題 児童生徒のメンタルヘルス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 「学校保健の動向」公益社団法人日本学校保健会	6. 最初と最後の頁 91-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件(うち招待講演 7件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 管思清, 大島郁葉, 清水栄司, 富田望, 高橋徹, 本郷美奈子, 熊野宏昭
2. 発表標題 成人期男女の自閉特性に関する性差: マインドフルネス・社会的カモフラージュ行動・社交不安からの検討
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会 第48回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大島郁葉・田上博喜・大植崇・野口晃菜
2. 発表標題 ダイバーシティへの障壁：マイクロアグレッションについて考える
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第48回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大島郁葉
2. 発表標題 認知行動療法、対人関係からうつ病治療を考える 「認知行動療法の汎用性：「治療」から「支援」へ
3. 学会等名 ヴィアトリス製薬株式会社 イフェクサー講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大島郁葉
2. 発表標題 青年期自閉スペクトラム症への心理評価および心理・社会的支援
3. 学会等名 千葉県発達障害者支援センターCAS 医療従事者向けセミナー（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大島郁葉
2. 発表標題 発達障害とACAT、スティグマ、ニューロダイバーシティに関して
3. 学会等名 株式会社voice and peace（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大島郁葉
2. 発表標題 自閉スペクトラム症の特性にアプローチする認知行動療法：ACATの理論と実際
3. 学会等名 第141回千葉医学会例会・第40回千葉精神科集談会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大島郁葉
2. 発表標題 「みんな違って、みんないい!」～インクルーシブな社会の実現を目指して～
3. 学会等名 さがみはら発達障害連続WEBセミナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金子彩子，大嶋玲未，大島郁葉，井手正和.
2. 発表標題 定型発達”とは何か？自閉スペクトラム症者の特徴からの再考.
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本郷美奈子，大島郁葉，仁田雄介，高橋徹，清水栄司.
2. 発表標題 社会的カモフラージュ行動尺度（the Camouflaging Autistic Traits Questionnaire：CAT-Q）日本語版の妥当性と因子構造の検討.
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第47回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大島郁葉, 牧之段学, 義村さや香, 本田秀夫.
2. 発表標題 成人期の自閉スペクトラム症のメンタルヘルス
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第47回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大井瞳, 大島郁葉, 稲田尚子, 熊谷晋一郎
2. 発表標題 マイノリティの視点から見た認知行動療法
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第47回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大島郁葉
2. 発表標題 児童思春期の高機能自閉スペクトラム症児者と保護者に対する認知行動療法を用いた心理教育プログラム「ASDに気づいてケアするプログラム (ACAT)」効果検証.
3. 学会等名 第10回自閉症学研究会.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Oshima F, Takahashi T, Guan S, Takenaka H, Sophie Sowde.
2. 発表標題 Autism spectrum disorder and Society.
3. 学会等名 Top runners lecture collections U21 Autism Research Network (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Oshima F, Takahashi N, Tsuchiyagaito A, Kuwabara H, Seto M, Hongo M, Hirano Y, Sutoh C, Ozawa Y, Kawasaki Y, Masuya J, Sato N, Nakamura S, Nakagawa A, Shimizu E.
2. 発表標題 Does self-awareness of autistic traits contribute to adaptation in autistic adolescents? Results from a randomized controlled trial of adolescent-parent participatory cognitive behavioral therapy for high-functioning autism spectrum disorder.
3. 学会等名 7th Asian CBT Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Oshima F, Takahashi N, Tsuchiyagaito A., Kuwabara H, Seto M, Hongo M, Hirano Y, Sutoh C, Ozawa Y, Kawasaki Y, Masuya J, Sato N, Nakamura S, Nakagawa A, Shimizu E.
2. 発表標題 Cognitive-behavioral family therapy as psychoeducation for adolescents with high-functioning autism spectrum disorders: Aware and Care for my Autistic Traits (ACAT) program: a pragmatic multisite randomized controlled trial
3. 学会等名 INSAR (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本郷美奈子, 大島郁葉, 近藤清美, 服巻智子, 鳥居深雪
2. 発表標題 思春期以降の高機能自閉スペクトラム症者の内的不適応感の問題について考える - 愛着・トラウマ・スティグマの視点から -
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 本郷美奈子, 大島郁葉, 近藤清美, 服巻智子, 鳥居深雪
2. 発表標題 思春期以降の高機能自閉スペクトラム症者の内的不適応感の問題について考える - 愛着・トラウマ・スティグマの視点から -
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大島郁葉, 中川彰子, 谷晋二, 熊野宏昭
2. 発表標題 成人の高機能自閉スペクトラム症者に対する第3世代の認知行動療法
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 本田 秀夫、大島 郁葉	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 220
3. 書名 おとなの自閉スペクトラム	

1. 著者名 大阪大学大学院連合小児発達学研究所	4. 発行年 2022年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 168
3. 書名 発達障がい	

1. 著者名 大島 郁葉、桑原 斉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 ASDに気づいてケアするCBT	

1. 著者名 大島 郁葉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 事例でわかる思春期・おとなの自閉スペクトラム症	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土屋垣内 晶 (TSUCHIYAGAITO AKI) (30778452)	千葉大学・子どものこころの発達教育研究センター・特任研究員 (12501)	
研究分担者	大浜 俊幸 (OTANI TOSHIYUKI) (60456118)	千葉大学・総合安全衛生管理機構・教授 (12501)	
研究分担者	稲田 尚子 (INADA NAOKO) (60466216)	帝京大学・文学部・准教授 (32643)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------